

ジェンダーの視点によるオリンピック開会式分析 ～メディアのガイドラインに照らして～

登丸 あすか*

現在の社会はメディアが私たちの日常生活に深く浸透するメディア社会であり、スポーツもまたメディアを介して参加し経験するものとなっている。本研究は、国際的メディア・イベントであるアテネおよび北京夏季オリンピック開会式報道をジェンダーの視点から分析し、メディアがどのように「スポーツ」を構成しているかを検証するものである。分析の結果から、メディアは開会式当日の出来事を時系列に報じつつ、スポーツ選手をジェンダーステレオタイプ化した形で提示していることが明らかになった。このようなスポーツ選手像は視聴者の目を楽しませるような、「魅せる」映像として提示されているが、その一方でスポーツを通じた交流や平和・平等な社会の構築といったオリンピズムの理念が抜け落ちてしまっている。オリンピズムの根本原則やメディアのガイドライン（自主規律）に照らして考えれば、人権尊重や報道の多様性といった観点からメディアの在り方を問い直すべき状況にあるといえるだろう。

Key Words : オリンピック開会式, メディア, スポーツ, ジェンダー

1. はじめに

現在の社会は、テレビや新聞、ラジオ、雑誌、インターネット等の多様なメディアが私たちの日常生活に深く浸透するメディア社会である。そのようなメディア社会においてスポーツとは、自分が実際に参加して楽しむだけでなく、メディアを通して体験するものでもある。とりわけ、オリンピックやワールドカップのような世界的規模の大会では、実際に参加したり観戦したりする人よりもメディアを通して経験する人の方が圧倒的に多い。メディアにとっても世界規模の大会は視聴率を獲得できる魅力的なコンテンツであり、メディア・イベントとして大々

*人間学部コミュニケーション社会学科

的に取り組む。そのような国際的なスポーツメディアイベントでは、力強い泳ぎを見せる男性水泳選手や、美しい演技を披露する女性フィギュアスケート選手に憧れをもち、そこに将来の自分の姿を投影する子どもや若者もいるだろう。メディアは私たちに、スポーツとは何か、どのように楽しむものか、身体をどう捉えるべきかなどについて語りかけているのである。

2. 先行研究

メディアが提示するスポーツや身体の内り方についてはジェンダーの視点からさまざまな問題提起がなされてきた。「ジェンダーとメディア」の領域における国際的な研究活動の基軸となったのは、1975年の国際女性年からスタートした国連主催の世界女性会議である。この会議は1975年から5年あるいは10年ごとに開催されている。1975年当初から女性問題を解決する上でメディアの果たす役割と影響が少なからず認識されてはいたものの、1995年の第4回国連世界女性会議における北京行動綱領によって「女性とメディア」が重大な領域として設定された。

北京行動綱領「J項. 女性とメディア」では、私たちの日常生活にメディアが深くかかわるメディア社会の到来を指摘し、ますます増大するメディアの影響力について述べた上で、この領域における目標を以下の通り2つ設定している¹⁾。

- J1. メディアと新しいコミュニケーション・テクノロジーにおいて、またそれらの活用を通して、表現と意思決定への女性の参加とアクセスを拡大すること。
- J2. メディアの女性表現を調和のとれたステレオタイプではないものにする（メディア内容におけるジェンダーの平等と公正の推進）

J2にあるように、メディア内容におけるジェンダーの平等と公正の推進を目指して行われるジェンダーステレオタイプに関する研究は、この領域において最も多くの蓄積があり、伝統的なジェンダーの価値観を再生産しているとしてマスメディアを批判の対象としてきた（例えば、井上、1989、村松・ゴスマン、1998）。ジェンダーの視点からスポーツ番組を分析した先行研究では、ニュース番組等で取り上げられる女性スポーツの割合の低さが示され（飯田、2004；80-82）、女性選手が登場する割合の少なさと共にジェンダーのバランスを欠いた報道の問題が指摘されている（例えば Wilson & The Amateur Athletic Foundation of Los Angeles eds., 2000）。日本のニュース番組やスポーツ番組では、日常的によく目にする野球やサッカーの報道を通じて男性プロスポーツ選手が数多く登場する。一方、女性選手が注目される場合には、競技の模様や結果だけでなく、女性役割が強調され（飯田、2002）、メディアのコマーシャルの観点から身体がジェンダー化されているとの指摘もある（平川、2002）。

先行研究からも明らかなように、スポーツ選手の取り上げられ方やスポーツの報道の仕方は、

実際のスポーツ選手やスポーツの現状をありのままに映し出しているわけではない。メディアは特定の選手の行動や発言の一部を選び出して構成し再提示しているのである。これは事実を伝える役割を担うニュース報道においても当てはまる。取り上げられるスポーツの種類や選手、専門家の意見、レポーターによるコメント、ハイライトとして示す競技場面等は、メディアによる数多くの選択を経たものであり、構成された「スポーツ」である。つまり、「メディアは能動的に読み解かれるべき、象徴的（あるいは記号の）システムであり、外在的な現実の、確実で自明な反応などではない」（マスターマン、2010；28）のである。

一方、メディア組織はメディア内容や表現方法に関わる責任を自主規律という形で表明している。具体的には、日本放送協会番組基準や日本民間放送連盟放送基準、日本民間放送連盟放送倫理基本綱領など、メディア倫理に関わる放送基準や綱領などがあり、それらはホームページ上で公開されている。これらの基準や綱領には、メディアは民主主義の精神を重んじ、人権を尊重し、性別による差別をしない旨が明言されている。こうした綱領から、ジェンダーのステレオタイプに関する問題は、単にメディア内容におけるジェンダーの平等と公正を推進するためだけではなく、メディアの在り方そのものに関わるものであると確認できる。

以上のような問題意識から、本研究の目的は、現在のようなメディア社会においてメディアがどのように「スポーツ」を構成しているかをジェンダーの視点から分析し、スポーツメディアの在り方を問うための手がかりを提示することである。

ここで、分析対象であるオリンピックの意義について確認したい。本研究では、国際的なスポーツイベントとして夏のオリンピック開会式報道を取り上げるが、オリンピック憲章の根本原則には以下のようにある。

- ・スポーツを人間の調和のとれた発達に役立てることにある。その目的は、人間の尊厳保持に重きを置く、平和な社会を推進することにある。
- ・人種、宗教、政治、性別、その他の理由に基づく国や個人に対する差別はいかなる形であれオリンピック・ムーブメントに属することとは相容れない。

オリンピックはこの原則に則って開催されている。本研究の目的は、人権の尊重と平和で平等な社会の構築という理念をもつメディアの在り方を問うことであり、オリンピックの開会式はこの目的に適した分析対象といえる。本研究では、より普遍的な分析を行うために2大会分の開会式報道を取り上げ、ジェンダーの視点からそこで提示される「スポーツ」を分析する。

3. 分析の手順：方法と対象

本研究では、鈴木（2003）の分析方法を用いて、五輪報道の構成分析、および映像・音声技法に着目した登場人物のジェンダー分析を行う。

まずデータ収集のため、2004年アテネオリンピック、2008年北京オリンピックの開会式終了後のニュース番組を全局録画した。アテネオリンピックの際には、8月13日実施の開会式および翌日の夕方のニュース番組を録画し、公共放送と民間放送を比較するためにNHKと民間放送1局を選択した。また北京オリンピックの際には、8月8日の開会式および翌日の民間放送2局の朝の時間帯の情報番組を対象とした。具体的な分析対象は、表1、表2のとおりである。

表1. 2004年アテネオリンピック夏季競技大会開会式報道

放送局	番組名	時間帯	ニュースタイトル
NHK	ニュース7	19:00-19:30	アテネ五輪開幕（4分35秒）
フジ	スーパーニュース	17:30-18:00	「発祥の地」で華麗に開幕（2分46秒）

表2. 2008年北京オリンピック夏季競技大会開会式報道

放送局	番組名	時間帯	ニュースタイトル
日テレ	ズームインサタデー	5:59-8:00	北京オリンピックついに開幕（1分21秒）
フジ	めざましどようび	6:00-8:30	北京オリンピック開幕（5分24秒）

次に、録画した番組をすべて「番組全体の構成の流れ」記入シート（鈴木、2003；52）に書き出し、開会式を取り上げるニュース項目を選び出した。

さらに、開会式関連のニュース項目の中から、スポーツ選手に焦点を当てたものを1項目ずつ選び、その内容を映像技法と音声技法に分けて「ニュース報道の構成の流れ」記入シート（鈴木、2003；49）に書き出した。そして、ニュースに登場する人物を性別に分類し、映像技法と音声技法に着目してニュースの構成を記述した。

4. 分析の結果

4-1. 番組構成分析

表3は分析対象である開会式報道のニュース4項目の構成を場面ごとに提示したものである。表3をみると、開会式報道は時系列で構成されていることがわかる。日本のスタジオから開会式前のスタジアム周辺の様子、セレモニーの様態、入場行進、聖火点火、選手のインタビューという流れであり、アテネ大会時には会場周辺の場面が映し出されるものの、それ以外は全く同じ構成である。開催地、開催年とそれを放送する局の違いに関わらずほぼ同様の構成で開会式報道がなされている。

表3. アテネ・北京開会式報道構成の流れ

アテネ	NHK	スタジオ⇒会場周辺⇒セレモニー⇒入場行進⇒聖火⇒選手インタビュー			
	フジ	スタジオ⇒会場周辺⇒セレモニー⇒入場行進⇒聖火⇒選手インタビュー			
北京	日テレ	スタジオ	⇒	セレモニー⇒入場行進⇒聖火⇒選手インタビュー	
	フジ	スタジオ	⇒	セレモニー⇒入場行進⇒聖火⇒選手インタビュー	

また、いずれの開会式もおよそ3時間程度と長時間に及ぶものであったが、その様子はセレモニーとしてダンスパフォーマンスや歌などの極一部しか放送しない一方で、花火や聖火点火など火や炎のシーンを多用している。北京五輪のフジでは「一つの世界、一つの夢」という大会テーマを紹介しているが、オリンピズムの目的を謳うようなスピーチや平和への祈り、選手宣誓などの場面はどの局も放送していない。

4-2. 登場人物分析

4-2-1. クローズアップされるスポーツ選手

クローズアップは人物や物を画面の上に大きく映し出す技法であり、何かを強調したい場合に用いる。ニュースではよく人物の顔がクローズアップされ、その表情が時には言葉よりも雄弁に多くのことを物語る。例えば、政治家が選挙に敗れた際に涙を流す表情をクローズアップすれば、音声やテロップなど言葉の説明がなくとも、本人の悔しさと悲しい気持ちを十分に表現することができる²⁾。

では、オリンピック開会式報道ではどのような選手の表情がクローズアップされ、その表情は何を物語っているのだろうか。表4はアテネ、表5は北京の開会式報道でクローズアップされる人物を日本人選手とその他の国の選手に分類し、男女別の人数を明らかにしたものである。

表4. アテネ五輪開会式報道でクローズアップされるスポーツ選手（人）

	女性		男性	
	日本人	外国人	日本人	外国人
NHK	8	3	2	2
フジ	5	1	3	0
計	13	4	5	2
	17		7	

表5. 北京五輪開会式報道でクローズアップされるスポーツ選手（人）

	女性		男性	
	日本人	外国人	日本人	外国人
フジ	1	1	2	3
日テレ	1	0	1	0
計	2	1	3	3
	3		6	

まず出身国に注目して表4をみると、外国人は女性4人、男性2人が登場している。また、表5の北京においても外国人が4人と全体のほぼ半数を占めている。開会式のニュースでは外国人の選手や特に旗手が何度もクローズアップされ、国際的なスポーツの祭典であることを示している。

次に性別に注目すると、アテネ五輪（表4）では女性選手の人数は17人、男性選手は7人と女性が圧倒的に多い。すでに述べたとおり、ニュース番組に登場する女性のスポーツ選手の割合が総じて低いことを考えると、オリンピックの開会式という国際的なメディア・イベントにおいては女性の登場が比較的多いことがわかる。

音声技法に注目すると、NHKでは、バレーボールの栗原恵選手と大山加奈選手が入場した際に、「メグカナちゃん、バレーボールの」という女性のナレーションや、「吉原選手も笑っていますよ」「向こう側に卓球の愛ちゃんの顔が見えましたよ」という男性のナレーションが挿入され、ケータイのカメラで記念撮影をしている福原選手の笑顔がクローズアップされる。また、男性選手である井上康生選手もここでは「康生選手」と苗字ではなく名前で紹介されている。

一方、アテネ大会を報じるフジでもバレーボールの栗原選手と大山選手は「メグカナ」と紹介されており、柔道の鈴木選手と井上選手のクローズアップシーンでは「柔道の鈴木、井上の両選手がおどけてみせている」という男性ナレーションが加えられている。

表5の北京オリンピック報道では女性3人、男性6人と男性の方が多し。表5ではそもそもクローズアップされる人物が全体的に少ないが、アテネ大会時のように女性の笑顔を多用するような場面は少なくなっている。

アテネと北京大会でクローズアップされる選手は、真剣な表情で開会式に参加する姿ではなく、入場行進の前後あるいは最中での笑顔や待ち時間のリラックスした様子の映像が使われている。それらの映像によって、選手がオリンピックを「楽しんでいる」ことが強調されているのである。

4-2-2. インタビューされるスポーツ選手

メディア側が一方的に映し出すクローズアップの技法とは異なり、インタビューで取り上げられる人物は自身の発言によって自らの意思や考えを直接オーディエンスに伝えることができる。しかし、誰もが自由に発言しているわけではなく、その人物や発言内容もまたメディアによって選択されたものである。十分に意見を聞く価値があるとメディアによって判断された人物がインタビューされた選手として登場している³⁾。

表6はアテネ、表7は北京の開会式報道でインタビューされる選手とその発言内容である。アテネ大会の報道では、フジとNHKで全く同じ人物のインタビューを取り上げていたため、ここではフジを例に表6を作成している。なお、NHKでも同じ人物のほぼ同様の発言内容が採用されている。312名の日本の選手団のうち、インタビューを受けた人物が同じであるということは、非常に限られた人物しか取り上げられていないことがわかる。

表6. アテネ五輪開会式報道でインタビューされる人物と発言内容：フジ

性別	名前 (年齢)	発言内容
男性	井上康生 (26)	すごい感動でまた、4年前の気持ちになりましたんで、またがんばりたいと思います。
	鈴木桂治 (24)	やっぱり聖火が点いたときは燃えますね、やっぱり。
女性	浜口京子 (26)	自分の国の、日の丸を持って旗を持って行進できたことが一番良かったです。
	福原愛 (15)	火？ (女性レポーター：聖火？聖火？あの部分が一番良かった？) はい、なんかどうなるのかなって思ったら人間がずっとロボットだと思って、本物だとわかってすごいびっくりしました。

注：選手の年齢は2004年8月のアテネオリンピック開催当時のものである。

表7. 北京五輪開会式報道でインタビューされる人物と発言内容：フジ

性別	名前 (年齢)	発言内容
女性	潮田玲子 (24)	いよいよ本当に開幕したんだなという気持ちと明日からしっかり頑張らないとなと思いました。 (男レポーター：なんか開会式で印象的だったものって？) いやあ、やっぱり聖火ですね。全然思ってた…、どうやって点くんだろうと思ってて、すごかったです。
	上野由岐子 (26)	もう今の感動を忘れずに、ほんとに、やっぱり世界の頂点を目指して、みんなで力を合わせて頑張りたいと思います。
男性	鈴木桂治 (28)	いろんな選手と会う機会もあったんで、やっぱりすごい、気合も入りましたし。その分やっぱり緊張もすごい高まってますんで、ほんと、でも楽しみです。試合が。

注：選手の年齢は2008年8月の北京オリンピック開催当時のものである。

表6のインタビューで取り上げられる発言を見ると、男性選手は2人ともオリンピックに対する意気込みを語っている。一方、女性選手では、旗手を務めた浜口選手は日の丸に対する重みを述べ、福原選手はセレモニーの仕掛けに驚いたと笑顔で話すなど、競技とは直接関係しない内容である。また、こうした発言を促す女性レポーターの音声も入っていることから、質問者であるメディア側によってこの発言が導かれたことがわかる。

北京五輪大会の報道はフジを例に表7を作成した。潮田選手は小椋選手とペアを組むバドミントン選手であるが、ルックスがアイドルのようであるといった理由から「オグシオ」というニックネームでメディアに何度も登場している。ここではメダルを期待されるような実力のある選手がインタビューされる人物として選択されている。

いずれの選手も性別に関わりなく試合に対する緊張感や抱負について述べているものの、潮田選手に対しては開会式の感想を述べるように促す男性レポーターに対して、「すごかった」という漠然としたコメントをしている。

インタビューされる人物は、すでに有名な人物を取り上げる傾向にあるが、アテネ大会時の報道では、女性には漠然とした感想あるいは感情的なコメントが採用されることが多く、男性選手は、試合に対する意気込みや思いをもって開会式に臨んだ選手として提示されているといえる。

5. 結論と今後の課題

アテネと北京のオリンピック開会式報道を分析した結果、その番組の構成からオリンピックの報道の仕方がパターン化していること、そして、取り上げる人物とその取り上げ方からスポーツ選手がジェンダーステレオタイプ化された形で提示されていることが確認できる。

開会式報道は、局や時間帯、開催年の違いにも関わらず非常に似通った構成であり、オリンピック開会式報道として定型化していることが明らかになった。どの番組も基本的に開会式が始まる前のスタジアム周辺の様子から聖火点火に至るまでを時系列で伝える内容となっている。しかし、淡々と時系列に沿って開会式を報じているような構成でありながら、オリンピック委員会会長や開催国の代表によるスピーチ、選手宣誓、平和への祈りなど、オリンピックの理念や意義を語るような場面はほとんど取り上げられていない。開会式のセレモニー自体は、開催国の文化や歴史を踏まえた上でオリンピックの理念を伝えるものとなっているが、日本の報道からはそうした開催国のメッセージが十分に伝え切れているとは言い難い。

その一方で、セレモニーの場面では花火や炎など目を引く映像が多用されている。また選手が真剣に戦う姿勢とは異なる形で、スポーツ選手が五輪の舞台を「リラックス」して「楽しむ」場面として女性の笑顔が多用されていることが確認できる。「アイドル化」され笑顔を絶やさず感情的なコメントをする女性像は、オリンピックという大きなスポーツメディアイベントの中で「魅せる」映像として提示されていると考えられる。しかし、果たしてそのような映像を

見せることが、メディアを通してスポーツを楽しむということなのだろうか。

メディアのガイドラインに照らして本研究の結果を振り返ると、その構成や内容は人権の観点から配慮されなければならないにもかかわらず、そこにはジェンダーのステレオタイプがみられる。これは、単にジェンダーのバランスが取れていないという課題があるだけでなく、オリンピックの意義やスポーツを人権として捉える視点など、国際的な大会で共有することが可能な、グローバルな理念を提示する機会を逸しているともいえる。これは、多様な観点での報道を目指すというメディアの役割にも相反するものである。

最後に、近年のジェンダーに関する研究を踏まえて今後の課題について述べる。近年のメディアとジェンダーの研究においては、性別二元論を超えたジェンダー論の再考も重要視されている。またスポーツの領域でいえば、セクシャルマイノリティの立場に立ったスポーツへの参加の仕方やガイドラインの制定等が検討されている（藤山ほか、2010）。こうしたセクシャルマイノリティの観点に立ったメディアのガイドラインは、メディアの役割を改めて問う手掛りとして重要であり、それを再検討することが今後の課題といえるだろう。

このような観点に立つと、日本のメディアのガイドラインに多くみられるような「性別による差別をしない」という文言だけでは、メディアのどのような表現が差別につながるのかを判断することは難しい。カナダのテレビ局・CBCの制作者ガイドライン、*Journalistic Standards and Practices* を参照すると、ジェンダーに関するより具体的な放送基準が提示されている。メディアが積極的にその責任を果たそうとすれば、より詳細なガイドラインの提示が必要となる。今後、これらのガイドラインを日本のものと比較検討することで、日本のメディアの役割とは何かを改めて問い直すことができると考えられる。

注

¹⁾ 訳は鈴木（2003：165-167）を参照

^{2,3)} ニュースで用いられる映像技法、音声技法については鈴木（2003、2004）、伊藤（2006）を参照

引用文献

- 藤山新・飯田貴子・吉川靖男・井谷聡子・風間孝・來田享子・佐野信子・藤原直子・松田恵示（2010）. スポーツ領域における性的マイノリティのためのガイドラインに関する研究：海外ガイドラインの比較を通じた日本への示唆 スポーツとジェンダー研究, vol.8, 63-70.
- 平川澄子（2002）. スポーツ, ジェンダー, メディア・イメージ：スポーツ CF に描かれるジェンダー. 橋本純一編 現代メディアスポーツ論 京都：世界思想社, 91-115.
- 飯田貴子（2002）. メディアスポーツとフェミニズム. 橋本純一編 現代メディアスポーツ論 京都：世界思想社, 71-90.
- 飯田貴子（2004）. スポーツメディアの現状：テレビスポーツのジェンダー分析 同編 スポーツジェンダー学への招待 東京：明石書店, 80-90.
- 井上輝子・女性雑誌研究会（1989）. 女性雑誌を解読する：Compareopolitan 日・米・メキシコ比較研究

東京：垣内出版

マスターマン, L.: 宮崎寿子訳 (2010). メディアを教える：クリティカルなアプローチへ 京都：世界思想社

村松泰子・ヒラリー・ゴスマン (1998). メディアがつくるジェンダー：日独の男女・家族像を読みとく 東京：新曜社

オリンピック憲章 <http://www.joc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter2007.pdf> (2010年10月1日)

鈴木みどり編 (2003). Study Guide メディア・リテラシージェンダー編 東京：リベルタ出版

Wilson W. & The Amateur Athletic foundation of Los Angeles eds. (2000). Gender in Televised Sports: 1989, 1993 and 1999, Los Angeles, CA: The Amateur Athletic Foundation

参考文献

伊藤守 (2006). テレビニュースの社会学：マルチモダリティ分析の実践 京都：世界思想社

Journalistic Standards and Practices APPENDIX B - RELATED CBC POLICIES

<http://www.cbc.radio-canada.ca/docs/policies/program/sexrole.shtml> (2010年10月1日)

日本放送協会番組基準 <http://www.nhk.or.jp/pr/keiei/kijun/index.htm> (2010年10月1日)

日本民間放送連盟放送基準 <http://nab.or.jp/index.php> (2010年10月1日)

日本民間放送連盟放送倫理基本綱領 <http://nab.or.jp/index.php> (2010年10月1日)

鈴木みどり編 (2004). Study Guide メディア・リテラシー入門編 東京：リベルタ出版

付記

本研究の調査は鈴木みどりメディア・リテラシー研究基金の助成を受けて行ったものである。

(2010.10.6 受稿, 2010.11.4 受理)